

教職課程を最適化し高度化する「リエゾン型学びのネットワーク」へ

～令和の日本型学校教育を実現する福井大学教育学部フラッグシップカリキュラム～

福井大学教育学部では「令和の日本型学校教育」の実現を目指し、地域の実践コミュニティに参画しながら省察的に学ぶ「リエゾン型学びのネットワーク」を基盤とするカリキュラムにより、次世代型教員の育成を推進しています。

学習観・授業観の転換が目指す主体的・協働的・深い学びは、学習者どうしの架橋や学びの架橋といった、多層的・多重的なリエゾンのなかで活性化します。また、教員養成は大学だけで完結するものではなく、教師が成長するための学びのエコシステム構築が今求められています。この理念に基づき、複数の教職科目の学びの相互交流（リエゾン・プラットフォーム）や、フラッグシップ科目を中心とした理論と実践の循環（リエゾン・スパイラル）を軸に、教職の理論と実践、各教科・領域の専門的力量、インクルーシブ教育、ICT活用やSTEAM教育に関する指導力を体系的に育成し、地域との共創を通じて教育と社会の発展に貢献します。

1. フラッグシップ大学としての教員養成カリキュラム開発の基本デザイン

TASK

- 1 学習観・授業観の転換を担う教師育成のための7つの目標群に応えるフラッグシップ科目プログラムを加えたカリキュラム開発。
- 2 カリキュラム・オーバーロード問題への対応を見据え、ミニマムな免許課程（幼51単位、小中高59単位）へ再構成。
- 3 「理論と実践の往還」により、学習者主体の学び、主体的・協働的で深い学びや探究学習をデザインできる教師としてのコンピテンシー育成。
- 4 教育委員会や地域／海外との連携・協働を拡充し、教育プログラムを充実・展開。更に、中高大接続事業、地域教員希望枠設置、教育プログラムの県内他大学への展開を図る。
- 5 教職大学院教育との相似構造による学習デザインや、教職大学院科目先取り履修プログラムにより、学部教育と教職大学院教育の有機的な連携・接続を図る。
- 6 多様な子どもや特別な配慮や支援を必要とする子どもへの理解、対応力の育成。
- 7 総合大学として他部局との連携・協働を活用したプログラム展開の取組。

CHALLENGE

新たなフラッグシップ科目を設置すると同時に、全体として免許法要件を満たす科目配置としながらも、学びの質を十分に担保し、さらに教員養成機能の高度化を図るカリキュラムデザインが必要。

* 第3欄・第4欄の科目（小中）に含めることが必要な事項：

14項目（コアカリキュラム到達目標 129項目）

各事項を分離し個別の枠内で習得させる伝達的学習スタイルのみでは、授業時間数減により学びの質の担保・高度化が困難に。

SOLUTION

trans-actionalな学習を促す

「リエゾン型学びのネットワーク」

複数の学習内容・学年・学習の場を架橋する多層的・多重的なリエゾンをカリキュラムとして設計することにより、実践・行動との相互作用のなかでのtrans-actionalな学びの変容・深化プロセスの生成を促し、個々の知識・資質・能力の学習を動的な学びのネットワークに編み上げ、学び続ける教師としてのコンピテンシーを育成。

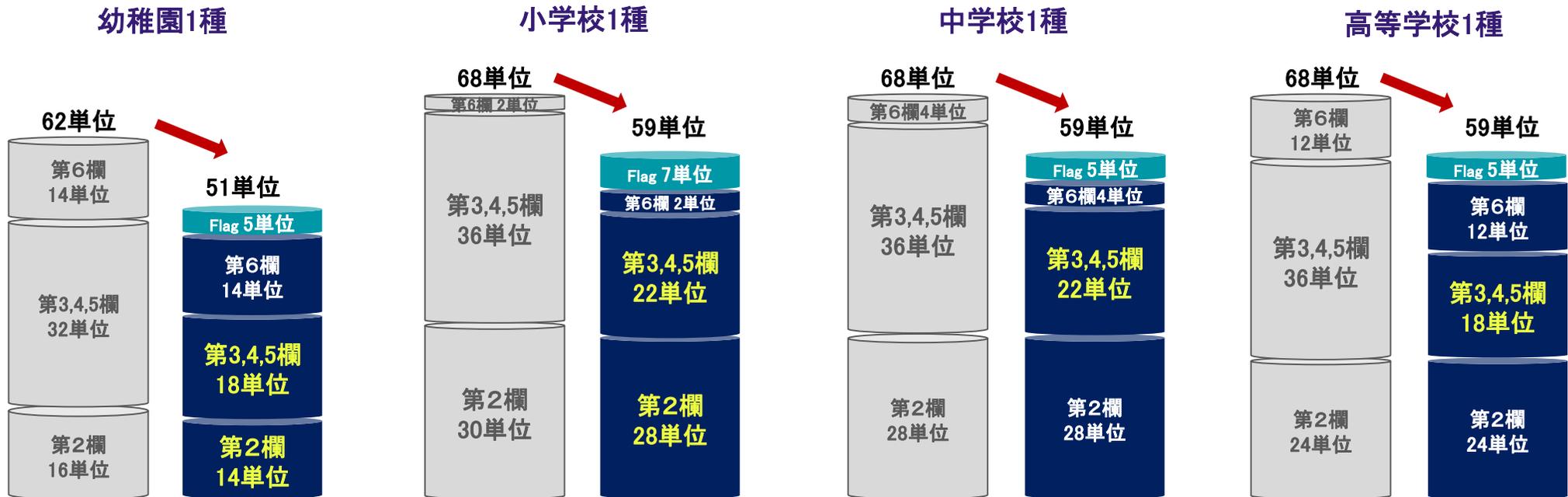
教職課程を最適化し高度化する「リエゾン型学びのネットワーク」へ

～令和の日本型学校教育を実現する福井大学教育学部フラッグシップカリキュラム～

フラッグシップ科目は、理論と実践の往還や融合を通じて、令和の日本型学校教育を支える教育者としての基盤を強化します。大学での学びを実践に活かし、自己及び協働省察を繰り返す循環的な学びにより、学生の成長を促します。また、地域や教育現場との連携を深め、協働のネットワークによる学習環境を構築します。

2-1. 令和6年度フラッグシップカリキュラムの免許要件単位構成

FLAGSHIP CURRICULUM



- ・ 法令上の修得単位数まで減じる。
- ・ 7つの重要課題について、できるだけ少ない数の新科目（フラッグシップ科目群）で対応する。
- ・ 総合大学としての取組として、第2欄科目を減じるのではなく、第3～5欄科目群の科目配置を精査する。
- ・ このため、「理論と実践の往還」と「異学年協働学習によるリエゾン・プラットフォーム」で学びの質を保証する。



3. リエゾン型学びのネットワーク

FLAGSHIP CURRICULUM

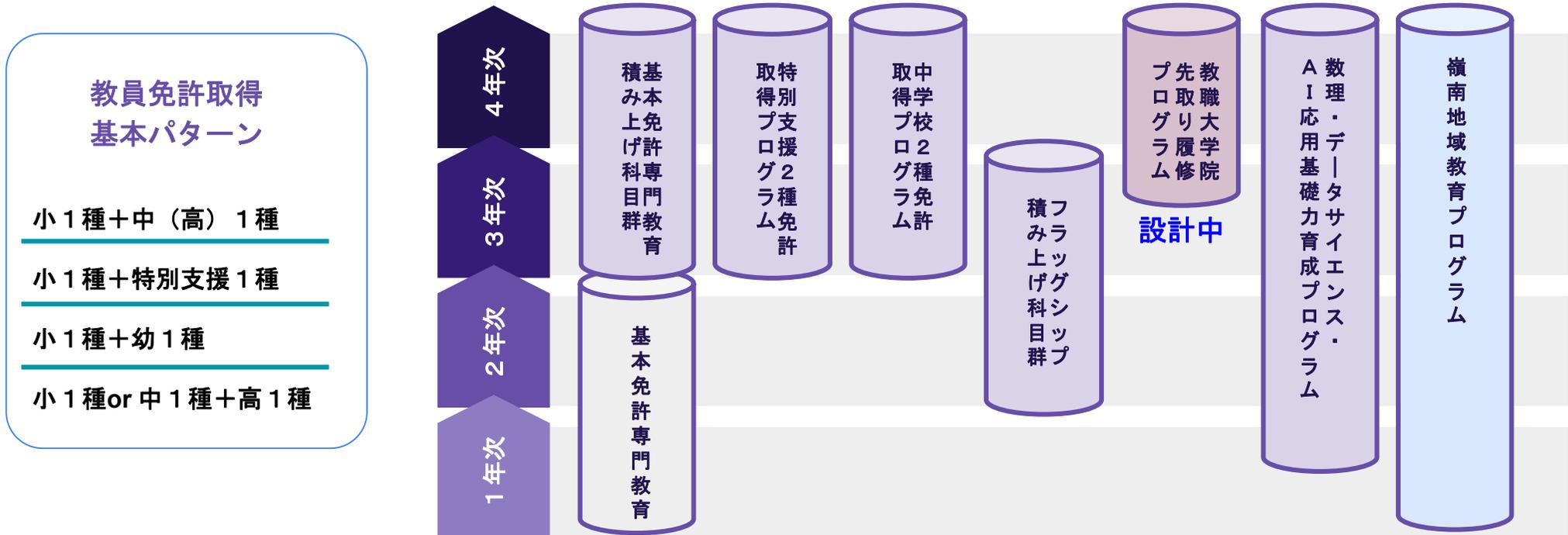
学生各自の教職専門性を広げるプログラムパッケージ

- ・地域の教育ニーズ
 - ・学生の学修ニーズ
- 大学側教育リソースのマッチング

※教育課程をミニマム（59単位）化し、学生の自由選択科目を増加 → 学生各自が、プログラム・積上げ科目群を選択履修し、
 学生それぞれが、地域ニーズに対応可能な異なる強みを持つ教員へ

Why Liaison?

なぜリエゾンが必要なのか。
 地域と共に教員養成に取り組むことで、新たな教育の姿を拓き共創することができるからです。





3. リエゾン型学びのネットワーク

SCHEME II

フラッグシップ科目で加速させる理論と実践のリエゾン・スパイラル

多様な実践を軸とするフラッグシップ科目を通して、理論と実践のtrans-actionを促す
 往還的学びのプロセスを加速し、地域の実践コミュニティに参画する学びのネットワークを広げる

- 必修5科目7単位+選択3科目10単位で多様な実践的・協働探究学習の長期的・継続的な学習をデザイン
- 他の教職理論や教科教育・教科内容の学習との実践と理論の往還のエンジンとして機能
- 地域の実践コミュニティに参画しながら省察的に学ぶ意義を体得する

1年次から地域の「学びのリアル」のなかで実践力育成「理論と実践」「個別と協働」の往還により探究力・協働力・主体性を育成

Why Liaison?

なぜリエゾンが必要なのか。
 教師が地域の具体的で実際のな課題に
 取り組む（地域と繋がる）姿勢が、子
 どもの探究心を育むからです。

地域実践演習（3年次）

地域における課題探究・実践・省察。附属学校や地域の公立学校での学校体験学習、福井市教育委員会と連携したプログラミング教育研修・実践。

心理発達支援プロジェクト I（2年次）

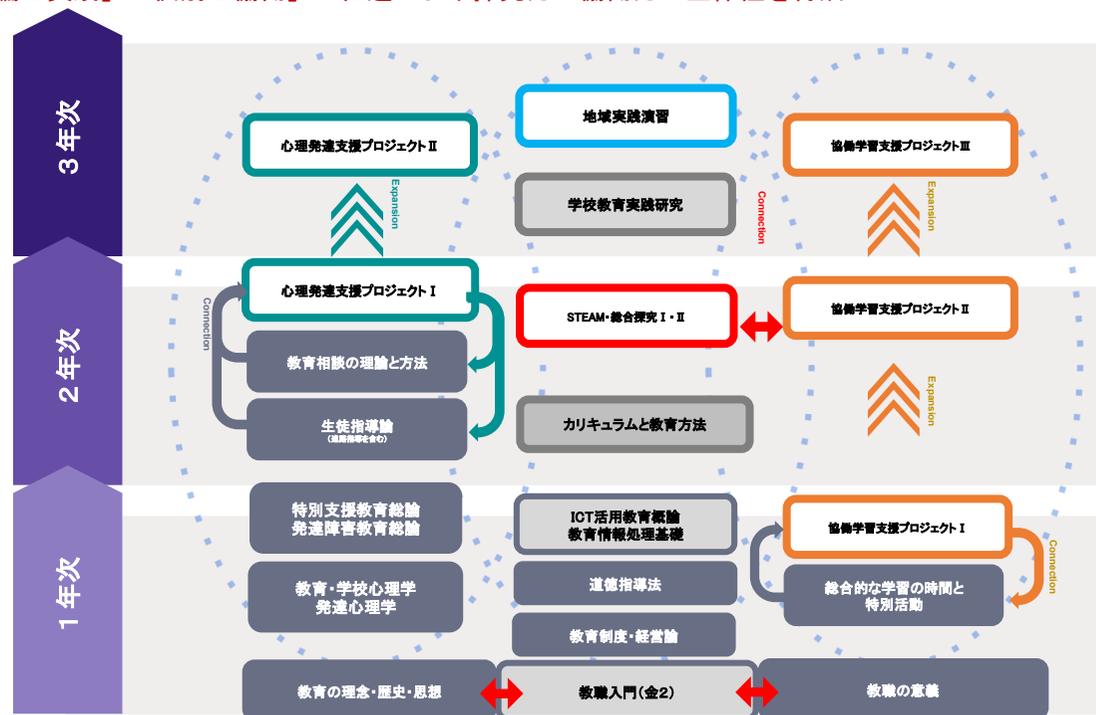
福井市教育委員会や適応指導教室と連携し、長期的に気がかりな子どもを支援。選択科目 II（3年次）

STEAM・総合探究 I・II（2年次）

ICTを活用した教科横断的な教材開発。チームによる共同的創造性の創発体験、日常から課題発見する視点の獲得。

協働学習支援プロジェクト I（1年次）

地域の児童の主体的・協働的・探究的な学びの企画・実践・ファシリテート。選択科目：II（2年次）、III（3年次）





3. リエゾン型学びのネットワーク

SCHEME III

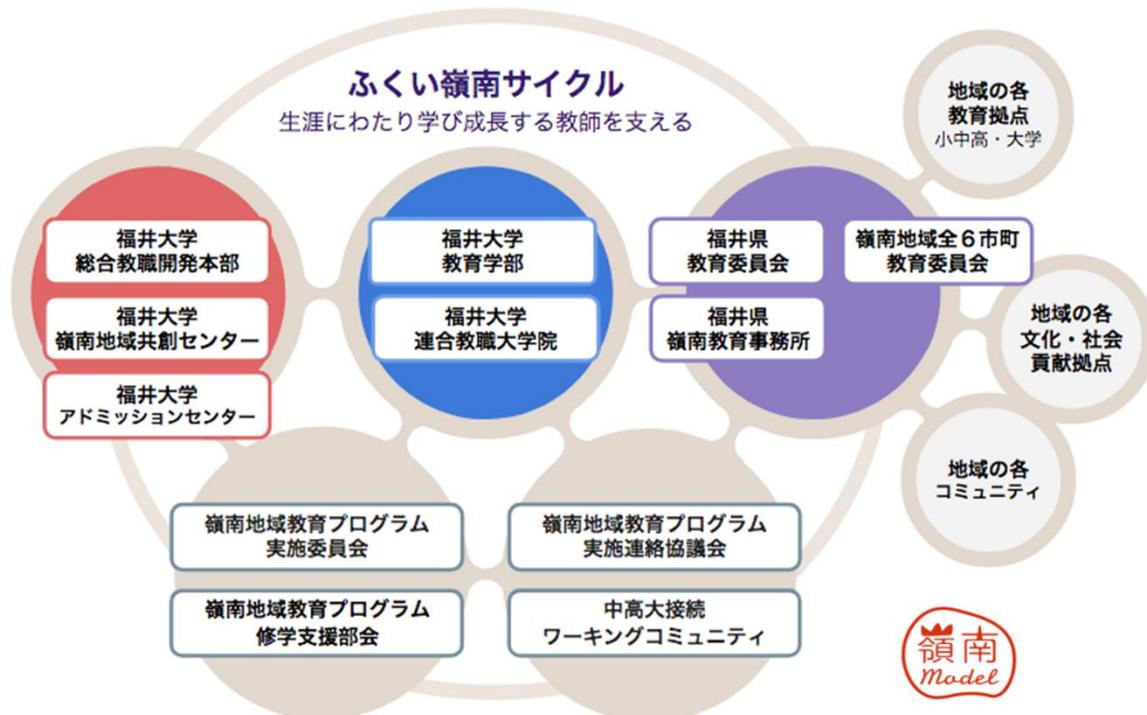
地域とのリエゾンと共創により学生の力量を育み教職への展望を支える

生涯を通じて働き、学び、成長できる自己実現の場としての教職へ

- 嶺南6市町・教育委員会と共に教員養成に取り組む「嶺南地域教育プログラム」(R4~)
- 教育委員会・地域のカウンセラー等と連携して取り組む心理発達支援プロジェクト(ライフパートナー事業)

地域共創の学習を通して将来の職場環境を知りロールモデルに出会う

学生の学修の協働運営を通して、学び続ける教師を支える地域・学校・大学コミュニティを編む



Why Liaison?

なぜリエゾンが必要なのか。
 地域と共に教員養成に取り組むことで、新たな教育の姿を拓き共創することができるからです。

地域と共に教員養成に取り組む

嶺南地域教育プログラム R4~

嶺南市町教育委員会・嶺南の学校・県教育委員会と大学教員とのパートナーシップにより企画・運営

1年次後期：「嶺南地域学A」【1単位】
 探究力 | 嶺南地域の現状と教育の特徴を知る

2年次通年：「嶺南地域学B」【1単位】
 革新力 | 具体的な授業づくりに向けた基礎探究

3年次通年：「地域実践演習」【1単位】
 共創力 | 嶺南の教育現場を知り省察する

4年次前期：「教育実習(2w)」【2単位】
 探究力・革新力・共創力で臨む教育実践



3. リエゾン型学びのネットワーク

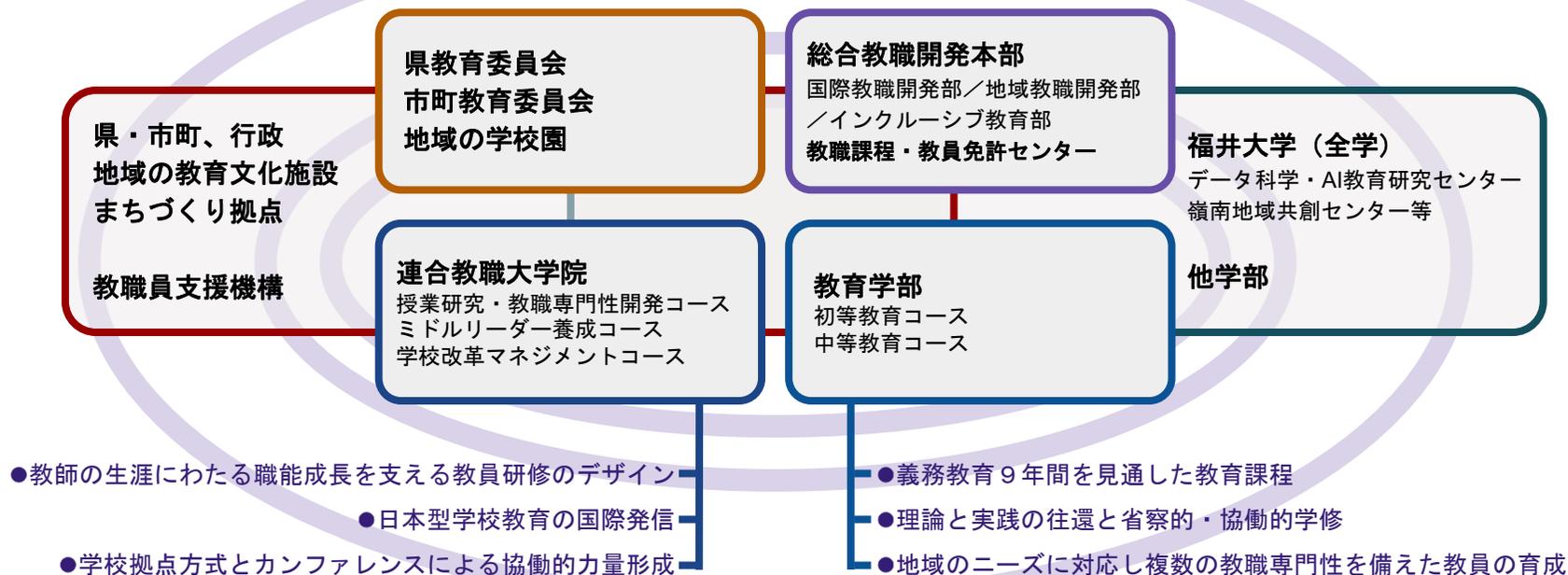
SCHEME IV

学部・教職大学院・地域で教員養成を支え育む地域共創コミュニティを醸成

教員養成と教師の職能成長を支える地域共創コミュニティの創出により、学習観・教育観の転換を実現しながら地域の教員養成・教師教育を支える体制維持・構築をめざす

- 教員養成と教師教育・現職教員研修の双方向からの改革アプローチ（学習観・授業観の転換）
- コンパクトかつフレキシブルな組織体制の構築（教育学部・連合教職大学院・総合教職開発本部）
- 生涯にわたる職能成長を支える共創コミュニティの醸成（県・市町教育委員会等とのパートナーシップ）

少子化・財政難の課題へ対応し、学習観・教育観の転換を実現する地域の教員養成・教師教育を支える体制維持・構築へ



Why Liaison?

なぜリエゾンが必要なのか。
 教員養成は大学・大学院だけで完結するものではなく、教師が育つエコシステム構築が必要だからです。



総合大学としての取組：全学部で展開可能な教職課程の実現を目指す

SUMMARY

① 自大学の役割や強みを生かした独自の取組と考え方

- ・ 教育委員会や地域・海外との連携・協働を拡充し、教育プログラムを充実・展開。
- ・ 県・市町教育委員会と連携した、中高大接続事業、地域教員希望枠の設置、教育プログラムの展開を推進。
- ・ 教職大学院教育との相似構造を活かした学習デザインや、教職大学院科目の先取り履修プログラムにより、学部教育と大学院教育の有機的な連携・接続。（7つ目の重点課題に対応、進行中）
- ・ 総合大学の強みを活かし、他部局との連携・協働によるプログラムを展開。（例：工学部との連携 ← 他学部免許科目の開発）

② 4大学共通部分に係る自大学の取組と考え方

- ・ 学習観・授業観の転換を担う教師育成に資する7つの重点課題に応えるため、フラッグシップ科目を組み込んだカリキュラムを開発。
- ・ 多様な子どもや特別な配慮・支援を必要とする子どもへの理解と対応力育成については、地域の協力のもと、理論と実践の往還で実現。
- ・ STEAM, AI・教育データサイエンスは、他部局との協働が可能。数理・データサイエンス・AI応用基礎力育成プログラムに組込む。

③ 減じる科目に対する考え方や工夫

- ・ カリキュラム・オーバーロード問題に対応するため、免許課程をミニマム（幼稚園51単位、小中高59単位）に再構成。
- ・ 1単位化又は、複数事項の統合により単位数を削減。理論と実践科目を組合せ時間割（時間帯）を有効活用。
- ・ さらに、「理論と実践の往還」と「異学年協働」を組み合わせることにより、学びをトータルにデザイン。

④ 開発したカリキュラムの全国展開の可能性

- ・ 第3欄・第4欄科目を中心に減じたモデルを設計・提案。導入が容易な科目から段階的に取り入れることも視野に。
- ・ 既存の教職科目や減じた科目とフラッグシップ科目を有機的に架橋する「理論と実践の往還」および「異学年協働」学習モデルの構築。
- ・ 幼小中高1種対応し、複数の重要課題に対応できるフラッグシップ科目として、5科目7単位を開発。
- ・ 幼小中高1種について、一部「工業」等を除くすべての免許課程で、フラッグシップ科目の活用を見通した開発。
- ・ 総合大学として、教育職員免許法施行規則の備考欄のフル活用を前提とした、教育学部以外の学部での教員養成も視野に入れ設計。